

E 5 現代のこども世代と老人との交流(第3報) - 居住形態別にみた場合 -  
兵庫教育大 ○ 田中幸恵 黒田玲子 南沢康子 戸谷 修

目的 人口の高齢化が進む中で、老人が子供家族との同居を望みながらもそれが実現しにくい現在、老人と子供家族との新しい交流のあり方が模索されている。核家族の増加で老人との接触が少なり若年世代が、将来の高齢化社会の担い手であることを考えると、若年世代と老人世代との交流のあり方が非常に重要な問題として浮きあがってくる。そこで大学生を対象に、その祖父母との交流実態を調べ、新しい交流のあり方を探ろうとした。

方法 昭和58年12月～59年3月にかけて、山口県、兵庫県、大阪府、愛知県<sup>の4県</sup>にある大学の64人の学生を対象にアンケート調査をおこなった。現在の老人と対象者との間の居住形態を①対象者と同居している場合と、対象者とは別居している場合に大別した。さらに別居者を②老人のみ暮らし③老夫婦のみ④おじかおば達と同居⑤施設在住の4つに分類して考察を試みた。

結果 ①では祖父母と毎日一緒にしている行為は、夕食、団らん、テレビを見るが約7～5割を占め、祖父母の仕事は、祖父はなし、祖母は家事が約4割で性別役割分担がみられた。②では孫からは訪問(9.4回/年)電話(5.8回/年)による働きかけが多く、祖父母からは電話(12.6回/年)訪問(8.2回/年)による働きかけが多い。手紙、贈物による交流は少ない。③でも同様な傾向がみられた。④では孫から訪問(5.7回/年)電話(3.4回/年)、祖父母から電話(7.0回/年)訪問(5.5回/年)による交流が多く、手紙、贈物による交流は少ない。⑤では頻度が少なくなるものの同様な傾向がみられた。別居している祖父母との交流は③との交流が一番多く、次いで③④⑤となっており、③と⑤の場合に交流が少なり1点に711では問題である。